

いのちを尊ぶ 社会をめざして IV

2025年、日本は国民の4人に1人が75歳以上という超高齢社会を迎えるといわれています。介護職の担い手不足、老老介護、介護離職などの問題が顕在化するなか、“介護”の現状を各分野の専門家から学び、だれもが尊厳をもって生きられる社会の実現に向けた提言をいただきます。

3-⑤

魂と向き合う 作業

佐々木 炎
(牧師)



人は誰しも「死」から逃れたい。しかし、どんなに科学が進歩しても、肉体の命に限りがあることは動かしがたい事実です。

〇さんは八十六歳の男性で、妻と娘夫婦と暮らしてきました。三年前から脳こうそくの後遺症で要介護状態となりました。移動は車イス、食事はなんとか自力ですが、排泄も入浴も介助が必要になり、介護サービスを利用していました。肺炎で入退院を繰り返していたころ、ご自宅を訪問すると、〇さんはぼつりとつぶやきました。

「オレはもう長くは生きられない。オレの人生、なんだったのかなあ」

〇さんは東北の中学校を卒業し、戦後復興で賑わう工業地帯に集団就職しました。二十五歳の時、一目ぼれした奥さんを射止め、結婚。以来、身を粉にして働き、家族を支えました。そして定年までの四十五年間、実直に勤めあげたのです。

そんな〇さんが死を意識して、人生を振り返るようになります。

父親が戦死し、貧困の中を女手一つで自分たちを育ててくれた母のこと。無学のゆえに仕事で苦労したこと。自死した同僚が苦しんでいたときに助けてあげられなかったこと。老いた母を郷里から呼び寄せて介護したこと。そして妻と苦楽を共にした六十年……。

「自分はなんのために生まれてきたのだろう」「自分の人生には価値があったのだろうか」

人は介護が必要になると、その先にある死を考へ始めます。介護度が高くなるほど、死を身近に感じるでしょう。死を前に味わう無力感がOさんに嘆きと深い絶望をもたらしたのです。

私はある日、悲嘆に沈むOさんに、星野富弘さんという人が書いた詩を見せました。

「いのちが一番大切だと／思っていたころ／生きるのが／苦しかった／いのちより／大切なものが／あると知った日／生きているのが／嬉しかった」

（『いのちより大切なもの』星野富弘著）

私はOさんに尋ねました。

「あなたにとって、命より大切なものってなんですか？」

Oさんは大粒の涙をこぼしながら答えました。「家族だね。妻と娘、孫たち。そして……疎遠になっている息子。息子に謝りたい」

Oさんは一か月後、息子さんと再会しました。十年以上、心がすれ違っていた父子です。何度か話し合ったものの、Oさんの存命中に和解は叶いませんでした。しかし、Oさんの表情に後悔はありません。Oさんの死後、息子さんは父親を赦すだけではなく、感謝して暮らしていると話してくれました。

人は死を意識すると、人生を振り返り、その意味や自身の存在価値に思いを巡らすものです。そして、自らの本当の願い、自分を支えている大切な絆に気付く、限りある命を後悔しないように生きようと心を定めます。この魂と向き合う過程、それは「恵みの時」といえるでしょう。

魂と向き合う作業の中で、自分の肉体の命が尽

きて、死を超えて残り続ける「永遠」を望み見るようになるのです。それはまさに、両親や先祖、周りの友人、さらには超越者（神仏）に大切にされて、今まで生かされてきた自分に気付くこと。この感謝を、命が尽きるときまで周りに伝えていくのです。

「『ありがとう』という感謝を、『ごめんなさい』という謝罪を、『もういいんだよ』という赦しを、『一緒にいられて幸せだった』という愛を伝え、『また天国で会おう』という死を超えた絆を約束するのです」（一部、沼野尚美氏の講演より引用）。

財産や地位、モノ、肉体はいずれ消えてしまいます。しかし、死を目前に「愛」を周りに伝えられた人は、家族の心に永遠に残る遺産を贈ります。だから家族は、死を意識した当事者に粘り強く寄り添い、その人が魂と向き合う作業を見守ってほしいのです。当事者も家族も、その過程で本当に大切なものに気付くことができるでしょう。そうすることで初めて当事者は、「これでよかった」



と人生を肯定し、永遠の故郷に魂を向けることができます。そして「我が子よ、良く生きた。おかえり」と神仏に迎えられることを楽しみに、安心して天への家路に旅立てるのです。

イラストレーション／大高郁子

プロフィール ささき ほのお 1965年、静岡県生まれ。牧師。介護福祉士、ケアマネジャー。代表を務める神奈川県福祉施設「ホッとスペース中原」などで介護に携わる傍ら、東京基督教大学などで講師を務める。また、介護をテーマに全国各地で講演を行なう。著書に『人は「命」だけでは生きられない』（いのちのことば社）など。